



心に残る

普及版第一集

とっておきの話

潮文社編集部編

心に残る とっておきの話

普及版第一集

潮文社編集部編

心に残るっておきの話 第一集 〈普及版〉

平成13年 9 月15日発行

編 者 潮 文 社 編 集 部

発行者 小 島 米 雄

発行所 株式会社 潮 文 社

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 2 -31

電話 03-3267-7181(代)

振替・00140-7-69107

組 版 株式会社 三光デジプロ

印 刷 有限会社 埼京印刷

製 本 株式会社 越後堂製本

© CHOBUNSHA 2001 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8063-1350-5

人間の再発見

新装普及版の発行にあたつて

人生はドラマだといわれる。

しかし私達は、日々、その機微きびに触れながら芳潤ほうじゆんな高級ワインの味と香りかおを、安価な合成酒なみに飲みくだしてしまつてはいないだろうか。

『心に残るとつておきの話』が、多くの読者の感動を呼んできたのは、市井しせいの実人じつじん生せいの中に、世の名作を凌しのぐ真実がちりばめられているからに違いない。

「人間万歳ばんざいと叫びたくなるような一冊です」「何気なにげない巡り合わせを、流砂りゅうさのように流してしまふか、玉として残すかは、その人の感性を表わすものでしょうか」

「絶句ぜっく——目のウロコが数十枚落ちる音がしました」「心底をゆさぶる強い衝撃しやうげき、かつて味あじわつたことのない感動は、魂たましいの根源こんげんを問うに充分であり、感謝せずにはいられない」「真実の言葉がこんなに胸を打つものかと、思わず本ほんに有難ありがたうと言つてしまいました」「どの編も人の真実の心を観かんずることができる。正まさに現代の経典きやうてんというべ

きものかと思ひます」「65年生きて、これ程ぎりぎりの線で感動、感銘かんめいを受けた事があるだろうか。何かこれからでも出来る様な気がします」「この本は本当に素晴すばらしい。山にたとえれば、本の富士山です」「この本を読んでいると優しくなれる。失いかけていた自分の原点に戻る。そんな本です」「ひたひたと押し寄せる感激に胸が一杯です。仰あおぎ見る人生讃歌さんかの金字塔きんじとうです」等々——

全国から寄せられた、こうした読者の声にも心打たれるものが多かった。

もっと読みやすく、もっと安く——という読者の方々の要望ようぼうにお応こたえし、文字も大きく、ふりがなも多くして、ここに新装普及版を出すことにしました。一冊あたりの収録しゅうろく篇数は減りましたが、順次発行の予定です。少しでも多くの方々に読んでいただけると幸いです。

平成十三年九月

潮文社編集部

（なお、筆者の職業等は旧版当時の記載のままになっています）

珠玉しゆぎよくの佳話集かわ

匂い立つばかりの人間群像ぐんぞう——

一読、心に沁しみ、胸底を揺さぶる、そんな感動的な話の数々。

人間の優しさ、悲しさ、親しさ、厳しさ、そして生きることの深淵しんえんをかいまみせる不思議さ——それをしみじみと感じさせ、考えさせるこの豊かさは、世の多くの名作に優るとも劣らない。それは「真実」だけがもつ重みによるものであろう。文字通り綺羅星きらぼしのような珠玉しゆぎよくの佳話集である。

海外からのものも含めて全国から投稿いただいた「心に残るとっておきの話」総数七六四篇の中から、ここには五八篇を収めさせていただいた。

原稿げんこうを寄せて下さった皆さんみなに、この紙面をかりて厚く御礼を申し上げたいと思う。

平成五年十月十五日

潮文社編集部

（この普及版第一集には四三編を収録、残り一五篇はいずれ後篇に入れる予定です）

心に残るとっておきの話 普及版第一集／目次

人間の再発見

一

珠玉の佳話集

編集部

三

ロンドンにて

森下紀代美 看護婦

九

一粒の麦

宗任 雅子 エッセイスト

一四

大きな10円玉

小林 まゆ 学生

二一

遅すぎた閃き

原田 一郎 元大学教授

二四

美しき空席

木戸 克海 会社員

二九

子供を見る目

橋本 一雄 元中学校校長

三二

煙草検査の思い出

加養 嘉雄 元小学校校長

三五

美味しいよ

彦田 信義 元警察官

四〇

古い千円札

津久井忠世 会社員

四四

ジョン・バヤンゆかりの地を訪ねて

相澤 忠一 大学教授

四九

ある英雄

野長瀬一郎 無職

五八

萩の曲

本間 麗子 会社役員

六一

ハワイのぬくもり

ジョン・ピーア 会社管理職

七〇

うちの娘です

進藤 敦子 会社員

八〇

ジョニーの海

田中 伸子 エッセイスト 療養中

八五

初恋

三品 進 建具販売店経営

九二

ふるさと冬の思い出

渡辺 武任 農業

一〇一

一日息子

夏紗富朝子 染色工房主宰

一〇七

ゆるしの海へ

福沢まさみ 主婦

一一二

駅の待合室にて

渋谷 欣治 大学名誉教授

一一九

夢の国の妻

森島 健友 元新聞記者 ライター

一二二

地獄の中の仏

刻々

父の幽霊

ベタのあしあと

カラスの心

去りゆくものの心

ペンキの文字

数十秒の記憶

奇跡を見た日

乾燥芋

心のリボン

一期一会

桜沢如一先生の秘話

中森たき代 会社員

辰巳 琢 元こども図書館長

下島 範恵 書道教授

山下 宣之 会社員

堀田 達郎 会社員

中村 恵子 主婦

菅 道也 元教師

北澤 和郎 元中小企業会館理事

高橋 昌義 新技術開発財団IIC審査委員長

大川 毅 放送作家

おばただお 高校教師

望月 由孝 高校教師

西尾 康人 会社顧問

一三六

一三九

一四六

一五三

一五七

一六二

一六九

一七七

一八一

一八六

一九〇

一九五

二〇四

一握りの米

火焰樹

母の言葉

生きる

重い石

アイタ・ペアペア

玲緒奈の秘密

甦った靴

高円寺の古本屋さん

久野 賢二 無職

渡辺 末男 元電報電話局長

片桐 一正 元大学教授

新井二喜夫 元小・中学校教師

陽羅 義光 ライター

伊藤真由美 主婦

岡田 浩子 主婦

岡 佐知子 主婦

重岡 静枝 手作り工房自営

二二五

二二二

二三〇

二三四

二四〇

二四七

二五〇

二五六

二六二

ロンドンにて

森下紀代美

昭和三八年生（埼玉県）
看護婦

十月にはいると、ロンドンの夕暮れは早い。午後四時になる頃には、太陽が沈み始める。

私は、看護婦として、七年間勤務した病院を辞め、英語学校に通うためにイギリスにやって来た。これからは、日本の看護の場面でも、英語の需要が増す（じゅよう）と思ったことと、本場のホスピスを自分の目で見て、学びたいと思ったことがその理由だった。

拙い英語を使いながら、何もかも一から始める生活は、日本で想像していた以上に刺激的（しげき）で厳しく、そして楽しかった。

ここには、キヨミという名前の一人の人間が存在するだけ。日本で何の仕事をして

いたか、どんな環境かんきやうの中にいて、どんな人達と過ごしていたか……などということは誰だれも知らない。いかに行動するか、どうやって人脈じんみやくを広げていくかは、すべて自身にかかっている。

英語学校に入学した日のレベルチェックで、中級の上のクラスに入ったものの、たちまち、私は、今までに味あじわったことのない劣等感れつとうかんに陥おとってしまった。

会話が成り立たない、ということとはなかったが、ヨーロッパ各国から来ている生徒達は驚くほど、耳がいい。会話に対する順応力じゆんおうりきが抜群ばっしゆんなのだ。

気がつくとも、授業中、できなくて、担当教師に苦い顔をされるのは、私だけだった。教師に与えられたその課題に初めて取り組む、という条件は、クラスメートは皆みな、同じはずなのに、私だけがつかえた。間違えた。

悔くやしくてたまらなかった。このままでは帰れない、と思った。

皆に追いつくためには、必死で勉強するしかない。毎日、学校から帰ると、どんなに疲れていても、四〇五時間は勉強するようになった。友達とパズやディスコに遊びに出かけた日さえ、自分の部屋に戻ると机つくえに向かった。

そんな毎日が続くうちに、英語で夢をみるようになった。何かを考える時、英語で考えることが多くなった。自分の中で、何かが少しずつ変わってきている、と感じ始めていた。

その日、私はロンドン内とはいえ、中心部からはかなり離れた、パーク・ロイヤルという駅のホームにいた。駅から徒歩十分程の所に、イギリスが誇るロイヤル・メイルという郵便システムの小荷物集配所があった。そこで、日本から自分で送った冬用の衣類の入った小包みを受け取って、帰る途中だった。

本当なら、各地域の郵便局が小包みを配達してくれるのだが、私の滞在する学生寮は、日中はオーナー夫妻も仕事に出るため、留守がちになり、受け取り人不在、という事になって、その集配所に送り返されてしまったのだ。

通知を受け取り、オーナー夫妻はすまながつてくれたが、忙しい彼らを煩わすのも気がひけた。結局、私が直接取りに行った方が早い、ということになり、薄暗くなった道を急ぎ足で、地図を片手に歩いた。

地理がよくわからず、しかも、他に誰も歩いている人がいない場所、というのは、

私を不安にさせるのに十分だった。もし、ここで、私の身に何かあっても、しばらく誰にも気づかれないかもしれないア、などと考えたりもした。本当に幸運に、同じく荷物を受け取りに来ていた、オーストラリア人の道連れができなかったら、私は不安で涙ぐんでいたかもしれない。

彼は、私の小包みを駅まで持ってくれ、下手だったが、日本人の友達に習ったという、日本語を話してくれた。久しぶりに聞く日本語だった。駅に着いて、お礼を言つて、別れた。

そして、ホームで電車を待つ間に、一つの平凡な、でも、忘れられない光景を目にした。

あたりは、すっかり暗くなっていた。反対車線の電車が、ホームに停止していた。私の立っている場所からよく見える窓に、若い夫婦と、その間に子供が座っているのが目に入った。貧しい身なりをしていた。

子供は二歳位だろうか。質素な服を着ていたが、白い肌^{はだ}に、小さなピンクの口元^{くちばし}が愛らしかった。

そのうち、お母さんの方が、バッグから一個のりんごを取り出した。子供の小さな口が、りんごにかじりついた。無邪氣に、嬉しそうに。

次に、お父さんが、そのりんごを受け取って、一口かじる。そして、また、子供がりんごにくつついた。

その次は、お母さんが一口。そうして三人は、一個のりんごを、幸せそうに三人で食べたのだった。見ている私は、いつの間にか泣いてしまっていた。

まるで、そこだけマッチで照らされたように温かくて、明るい光景。

三人は貧しくても、それ以上にきつと幸せだ。

純粹に幸せな場面を見て、それまで張りつめていた心の糸が溶けてしまったのかも
しれない。涙が止まらなかった。

今でも、ロンドンのことを思い出すたびに、まず、目にうかぶのは、懐かしいクラスメートとリージェント・ストリート、そして幸せそうだったあの親子の姿だ。本当の幸福の意味を、あの光景から教えられた、そんな気がしてならない。

一粒の麦

宗任 雅子
むねとう

昭和二十四年生（静岡市）
エッセイスト

四月の初旬しよげんのある日、東京・四谷よつや駅の向かいにあるイグナチヨ教会に立ち寄った。
春のうららの隅田川すみだがわ、上り下りの船人ふなびとが――

この主任司祭しさいだったヘルマン・ホイヴェルス神父しんぶは、滝廉太郎たきれんたろうの『花』がが大好きだった。廉太郎は神父の故国ドイツに留学していた。この旋律せんりつに、ドイツ歌曲かきょと通じるものを、神父は感じておられたのだろうか。

四谷には隅田川はないけれど、土手どてに続く桜並木なみきがある。春爛漫らんまん、神父は草葉くさばの陰かげから四谷の春を偲しのんでおられることだろう。

イグナチヨ教会は、その仙人せんじんのような風貌ふうぼうをした神父存命ぞんめいの頃に、足繁しげく通い、十